

## 産業の発展を支える人づくり

イラクの首都バグダッドの市街地から車で約30分。都市の喧騒を離れ、東へ向かって進んでいくと、幹線道路の脇に広々とした敷地と建物が見えた。正面の看板には、アラビア語で「アル・ザファラニア職業訓練センター」と書かれている。30年以上にわたり、イラクの発展を担う産業人材を輩出してきた職業訓練校だ。

訓練生の数は約200人。コンピュータ、重機、電気機械など10のコースに分かれ、「on the job training」のきめ細やかな指導が行われている。約6カ月の職業訓練を経て、彼らは社会へと巣立っていく。「シミュレーション用の機械を使って、実践的な技術の習得を目指しています」と話すのは、センター長のフダイヤ・アッバス・アルザイディさん。「大切なのは、一人一人

の能力や特性を考慮した指導。何事にも真摯な姿勢で取り組む、日本人専門家から学んだことです」。1970年代、イラクは経済発展に伴う建設ラッシュで、外国製の最新の産業機器が次々と導入されていた。そう、日本を含む世界各国の企業が競って進出していた時代だ。しかし、そこには大きな落とし穴があった。ハードはあっても、それを定期的に維持管理する人材がいなかった。街中では、壊れて停止したエスカレーターが砂ぼこりをかぶったまま放置された状態、ということも珍しくなかった。

そこでイラク政府は、産業機器の維持管理に携わる人材の育成に力を入れるべく、職業訓練校の設立を決定。戦後復興の過程で磨かれた、電気産業分野の技術力に定評のある日本に支援を要請した。そこでJICAは75年から4年間、日本人専門家の派遣を通じて、施設の図面作成や資機材の調達、講師の育成などを支援。79年12月に「電



エレベーターコースでは、授業用に導入されたエレベーター本体を使って実習が行われた



空調機の維持管理方法について学ぶ訓練生たち

# 職業訓練センターを イラク産業界の礎に

首都バグダッド郊外にある「アル・ザファラニア職業訓練センター」。イラクの産業界で活躍する人材育成を担うこの施設は、イラク人講師たちのきめ細かい指導に定評がある。そこには1970〜80年代、日本人専門家たちが残した熱い思いが引き継がれている。

機、三洋電機など各社を回りながら、「モノづくりだけでなく、機器の維持管理方法やそのコアとなる人材育成を含めて、技術力」なのだ」と研修員たちは実感したという。

三菱電機ビルテクノサービス株式会社（当時三菱電サービズ株式会社）の原田憲一さんは、83年から約3年間、エレベーター・エスカレーターコースの指導を担当した。「戦時下のイラクでプロジェクトを進める

のは、決して容易ではありませんでした。物理的な壁、制度的な壁、中でも一番厄介だったのは、意識的な心の壁です」と振り返る。しかし、満足と言うにはほど遠い環境の中で、イラク人の若い技術者たちは貪欲に知識・技術を吸収しようとしていた。「彼らのためにもこの土壌をしっかりと築いていかななくてはと、イラク人講師と日本人専門家が思いを共有し、一つ一つの壁を乗り越えていったのです」と話す。当時は治安対策のため、15時になるとセンターを閉めていた。「自分の宿舎に講師たちを呼んで、夜遅くまで議論を交わすことも少なくなかった。夜食にドーナツを作ったりもしました（笑）」。そういった人間くさい付き合いを通じて、彼らの間には揺るぎない信頼関係が築かれていった。

湾岸戦争の開戦によりJICAの支援が終了してからも、日本人専門家からの教えを携え、現地の人々の手によりセンターの運営は続けられた。最近では女性の社会進出を受けて、訓練生の半数を女性が占めるまでに。縫製、家財道具の修



若いエンジニアたちは、戦禍の中で“学べる”ことのありがたさをかみしめていた



産業機器の取り扱いには、五感を使った細かい作業が必要になる

## 寝る間も惜しんで 共に学ぶ

しかし80年9月、イラン・イラク戦争が勃発。日本人専門家たちは帰国せざるを得ず、プロジェクトは中断を余儀なくされた。「まだ走り出したばかりなのに」。イラク人講師たちと共に奮闘していた彼らにとって、悔しい決断だった。

それから3年。治安の回復を受けて、JICAはプロジェクトの再開を決定。83年9月、第一陣として4人の専門家が再びイラクの地を踏んだ。危険への不安が100%取り払われたわけではない。しかしながら、「こんな時だからこそ、国の将来を見据えた人材育成が重要だ」という、イラク政府の強い思いに後押しされたのだ。

とはいえ、「今、あそこで爆撃があった」という会話も当たり前の毎日。そんな中、日本人専門家として講師への指導を担当したのは、日本のメーカーの第一線で働いていたエンジニアたちだった。「技術協力を通じて日本の技術力や知見が評価されれば、イラクに対する日本製品の輸出促進にも大きく貢献する。官民連携の先駆けでした」と当時プロジェクトを担当していたJICAの末森満さんは話す。プロジェクトでは日本国内でも研修を実施。日立製作所、三菱電



プロジェクトでは、訓練生への指導方法についてもアドバイス。「一人一人とコミュニケーションを図り、それぞれの個性や強みを把握することが大切だと強調しました」と原田さん

JICAの支援により作成されたテキストが、今でも大切に保管されている



理、携帯電話の保守技術など、時代のニーズに即したコースの設立にも力を入れている。「日本人の仕事に対する正確さ、誠実さは、私たちの仕事のベースになっています」とセンターの講師たち。戦争中もイラクに身を置き、現場主義を貫いた日本人専門家たちの努力は、今もなお、そこに生き続けている。



# History

次世代への財産